The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シバンムシアリガタバチ？！
Author(s)	古川, 研一
Citation	makoto. 1978, 22, p. 6-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

シバンムシアリガタバチ？！

大阪府衛生部環境衛生課
環境衛生係長　古川研一

「〝ヘンな虫〟鉄筋住宅に出没」という見出しの昨年（S・五十二年）九月十九日の朝日新聞家庭欄のトップ記事は、「一見アカアリ風で、ほんとはハチの仲間ーアリガタバチというちっちゃな〝ヘンな虫〟が名古屋、京阪神から四国にかけて公団住宅やマンションに続々出没しはじめた……」という説明で始まっている。

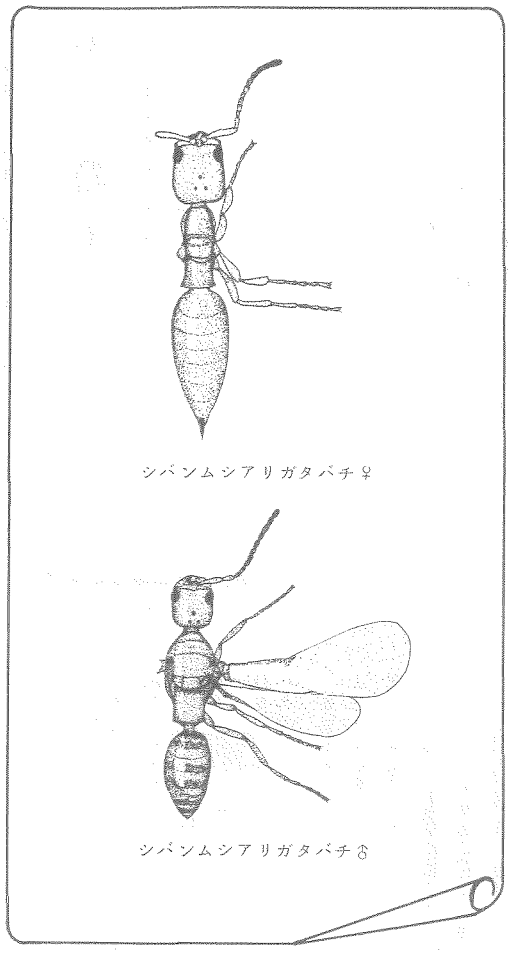
この虫はアリガタバチ科の昆虫で、一般にこの科の仲間は雌が無翅で、鱗翅目（チョオ・ガの仲間）か鞘翅目（甲虫の仲間）の幼虫に外部寄生するものが多い。現在まで日本では本種の外、三属三種が確認されており、それらは従来から衛生害虫として有名なクロアリガタバチ、また農業害虫であるメイガ、ハマキガ類の幼虫に寄生し天敵として有益なハマキアリガタバチ、ヒメマルカツオブシムシの幼虫に寄生するキアシアリガタバチ等である（岩田久二雄著、本能の進化、蜂の比較習性学的研究より）。

さて本題のシバンムシアリガタバチ（cephalonomia gallicola Ashm.）はクロアリガタバチ（体長・二～三ミリ）に比べてやや小型で、雌成虫は無翅で体長約二ミリ、アリによく似た形をしている。雄成虫は有翅で体長約一・五ミリ、ハチの形をしている。雌雄共に触角はアリのようにL字形に曲がり、体色は全体にアメイロをしている（別図参照）。

本種の大阪府下における過去三年間の発生状況をまとめてみると発生期間は主に六月から九月中旬の約三カ月間である。発生場所は殆んどが鉄筋コンクリート造りの中高層住宅で、しかも二階以上の高層部で発生している。成虫は天井、壁、畳、上敷、家具等あらゆる所を徘徊し、日中、夜間を問わず出現している。

本種による被害の状況はクロアリガタバチとよく似ており、室内で触れて毒針に刺されると激しい痛みを感じ、発赤を伴う痛痒感が数日続き、色素沈着を残して普通は一週間、ひどい場合は十日程治癒するまでにかかる。

本種の雌成虫は交尾後タバコシバンムシ（タタミオモテシバンムシか）の幼虫を見つけると毒針により麻酔し、その腹部に一～数卵産卵する。ふ化した幼虫は体長に外部寄生し夏期では約二週間で一世代を終る（幼虫期間は四～五日、蛹期間は九～十日）。一方タバコシバンムシについては年間二～三回発生し、三回発生の場合、第一回は五月下旬～七月下旬、第二回は七月下旬～九月下旬、第三回は九月下旬～十一月上旬で、夏期では一世代は七十余日を要する（幼虫期間は約四十日）。

駆除法については現在テスト中であるが、有機リン剤の粉剤を畳の下に散布しタバコシバンムシの畳への侵入を防止すると共にシバンムシアリガタバチ成虫の駆除はDDVP又はピレスロイド系の油剤の煙霧又はくん煙による速効的駆除を並用すると効果的である。又、畳の裏側、側面等に有機リン剤の油剤をうすく噴霧又は塗布する方法と上記の速効法を並用する方法も効果があると言われている。

刺された時の治療法は現在、これといった特効的な方法はなく、一般的な虫さされの薬をつける。むしろアロエ、ミセバヤ等の多肉植物の葉汁をすり込む方が効果的でないかと考えられる。